日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

ただ一人の後継者として、千二百年の伝統を守る。

墨匠（ぼくしょう）

伊藤 晴信 氏

三重県鈴鹿市に、およそ千二百年前から伝わる鈴鹿墨。寺子屋が普及した江戸時代、墨づくりは紀州徳川家の保護を受けて大きく発展するが、今では鈴鹿墨の製法を守る店は一軒しかない。

伊藤晴信さんは家業を途絶えさせないために、墨づくり職人の墨匠を目指す若者。しかし、初めは跡継ぎになる考えはなかったという。

きっかけは？

伊藤「幼いころから『跡を継げ』と言われ続けて嫌になり、高校卒業後は東京で漫画家を目指していました。でも、『鈴鹿墨づくりの後継者がいない』という新聞記事をインターネットで見て、悩みに悩んだ末、父に弟子入りすることを決めました」

墨づくりは10月から4月の寒い時期にだけ行う。煤（すす）を接着させる膠（にかわ）を湯煎して溶かすのだが、湯煎後に高温で放置すると膠が傷んでしまうためだ。

煤と膠を混ぜ、機械で荒練りした墨玉を揉む。両手に渾身の力を込めるが、繊細さも欠かせない。墨玉が光沢を放つその一瞬を見極め、木型に入れる。タイミングを誤ると墨玉が乾き、輝きは消え、そうすると売り物にならない。修業中の今は一日中墨玉を揉み続ける。要する気力と体力は並大抵ではない。

頃合いよく木型に入れられた墨玉は、見慣れた形の墨となる。もっとも完成にはまだ遠い。灰をかぶせ3週間、その後わらで結んでつるし、温度、湿度を管理しながらゆっくりと自然乾燥させていく。墨は古ければ古い程良く、最短でも100日、高級な物は3年から10年は乾燥させる。時間をかけることで人の手では取り除けない不純物が抜け、美しい色が出るのだ。

初めて一人でつくった墨が、ようやく乾燥を終えた。その墨を師匠とともに確認をする。

墨の出来は？

伊藤「墨を擦るとき硯に引っ掛かるような感じがして、それは墨玉を均等に練れていない証拠」

その出来は納得できるものではなかったが、どこに問題があるのか、自分自身でよく分かっていた。

墨匠への道は甘くないが、伝統を継ぐべく精進を重ねる若き職人は、しっかりと前だけを見据える。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2011年4月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 伝統を守るために、墨玉と格闘する姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

Harunobu Ito

1987年三重県生まれ。鈴鹿墨の製法を代々継承する「進誠堂」に生まれる。高校卒業後上京するが、鈴鹿墨最後の墨匠である父・伊藤亀堂氏に入門。現在は唯一の後継者として修業に励む。

鈴鹿墨（すずかすみ）

平安時代初期から、鈴鹿山脈産の松を焚いて取った煤を原料につくられ始め、江戸時代に隆盛。墨下りの滑らかさ、基線とにじみの調和が特徴で、墨としてはただ一つ、国の伝統的工芸品の指定を受けている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する
映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧になれます。
本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介しています。
アットホーム明日への扉 検索

TV番組
ディスカバリーチャンネル（CS）
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.065／錺金具職人 彫金師 小林 浩之 氏